

現代学生が示す宗教への意識と態度

—一九九二年～二〇〇一年のアンケート調査の分析—

井上 順孝

目次

- 一、はじめに
- 二、調査の概要
- 三、否定的宗教イメージの広まり—教団宗教、制度宗教への不信の深さ
- 四、比較的安定して維持される民俗宗教
- 五、宗教的サブカルチャーへの多様な信頼度
- 六、むすび

一、はじめに

日本の若い世代における宗教のかかわりは、とくにオウム真理教による地下鉄サリン事件以降、多くの議論を巻き起こした。宗教には無関心な若者が増えているという調査結果がある一方で、新しい宗教運動に惹かれる若者も

絶えない。「カルト宗教」という形容をされて社会的な批判を浴びるような宗教団体への所属を含めて、宗教に強い関心を抱く若者は一定数いるのは明らかである。だが、マクロに眺めれば、やはり宗教や信仰というものへの関心は薄れつつあるとするのが、妥当な見解であろう。

そこで宗教社会学的観点からさらに踏み込まなくてはならないのは、何をもって宗教的関心が深いとするかという基準である。この点は、現代における若者の宗教性を議論するというような場合には、ややもすればなおざりにされがちである。その理由は、この基準を議論することは、「宗教とは何か」という根源的な問題に直結していくからである。当然、どのような行為を宗教的行為と考えるのかということも、ある程度明確にしておかなければならなくなる。現代社会のような複雑な情報環境において、宗教とは何か、宗教的行為とは何かを論じる作業は、なかなか厄介な話である。複雑さへの予測が、この問を回避しがちな傾向を生む一因となっている。

若者に限らず、一般に日本人の信仰心とか宗教性といったテーマを論ずる場合、宗教の定義が曖昧になってきていることや、調査データがさほど十分ではないこともあって、実は見解が必ずしも一定していない。日本人は宗教的な国民であるのかそうでないのか、宗教を信じる人は増えているのか減っているのか。若い世代の宗教への関わりは深いのかどうか。こうした問に対する見解が、印象論に偏りがちになるのも、ゆえなきことではない。

たとえば、各種の社会調査を踏まえた上での現代日本人の宗教心については、大きく二つの評価がある。一つは日本人は国際的に見ても、宗教心が薄く、宗教への関心が乏しいという類の評価である。もう一つは多くの日本人は宗教的な行動に関わっており、国際的に見ても、非宗教的な国民とは言えないという評価である。前者のような判断は、最近の世論調査等においては、宗教を信じてと答える人が三割ないしそれ以下となっていることを根拠にされる。後者は、それにも関わらず、初詣をする人が七〇八割に達することや、葬式や年忌法要の際にみられる仏

教との関わりの根強さを重視する。何を宗教心の基準として議論するかで、結論は自ずと異なってくる。

そこで、アンケートという手法によって、回答者の意識や行動形態を議論する場合には、さまざまな問を発して、そこからある傾向を読み取ろうとする方法も重要になってくる。あらかじめ仮説を設け、調査結果からその仮説を検証するというやり方とともに、さまざまな現代的な問を発し、それに対する回答結果から、新しい問題の枠組を探り当てるといやり方を入れるのである。

年中行事や人生儀礼、あるいは日々生じている宗教にまつわる事柄への人々の評価や関心は多様である。とくに若い世代になると、情報時代の影響を大きく受けているので、宗教については、ときに一見矛盾するような見解を示したりする。そこで、なるべく多くの質問をすることで、そうしたものへの関わりや態度を細かくとらえていかねばならない。しかしながら、新聞社等のアンケート調査では、宗教に関する項目をそう多く設定することはなく、ごく基礎的なことについての概要が知れるのみである。対象を若者に限ったような調査となると、調査そのものがきわめて少なくなる。

このような現状認識と目的意識とに支えられて、若者を対象にした宗教意識に関する調査が一九九〇年代に始められた。國學院大學日本文化研究所の宗教意識プロジェクトがおこなった一九九二年の調査、及び同プロジェクトと「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトが合同で行った一九九五―二〇〇一年の七回にわたる調査である。¹⁾これらの調査は規模が大がかりであり、質問項目では、宗教系の学校に通ったことがどのような影響を与えているかという視点を一貫して有している。同時に若い世代の宗教意識や宗教行動を探るための多様な質問も設定されている。この調査によって得られたデータによって、若い世代における宗教の位置付けや、彼らに宗教あるいは宗教が関係する事象が、どのように受け止められているかの手がかりが得られる。

調査結果については、各項目の単純集計を中心とする報告書が作成されている他、いくつか特定の分析視点からの論及もなされている^②。本稿では、これらを参照した上で、独自の視点から分析を試みる。それは、学生たちの間で、宗教に関わる事柄が、大多数に共有されている意識や行動形態から、ごく一部にしか見られない意識や行動まで、程度によつて区分し、そこから学生たちの宗教や信仰に対する意識の傾向をマクロに把握しようとするものである。

そのために、分析を試みる事項を、まず宗教に直接関係した事象と宗教周辺の事象に分ける^③。そして、宗教周辺の事象を大きく民俗宗教と宗教的サブカルチャーに分け、さらに民俗宗教を人生儀礼、年中行事など共同体や家族で関わることが多い習俗的なものと、占いの類のもつばら個人的な関与のものに分けた。ここで、宗教的サブカルチャーというカテゴリーを特立させたのは、今の若者の宗教性や宗教的関心を考察する上で、重要と考えたからである。一九七〇年代半ば以降に起こったとされる社会変化の中で、宗教的サブカルチャーと呼ぶべきものが多様に展開した。若い世代はそれらに小さい頃から接して育っている。そのようなものに対する態度は、伝統的な宗教への意識や態度とどういふ関係になるのかを分析することは、現代宗教を扱う際に欠かせない事項である。

以上の事象に関する意識の一般的傾向を確認した上で、多くの学生に受け入れられているものはどういったもので、あまり受け入れられていないものは、どういったものかという観点から比較し、そこから何を読み取るべきかを論じたい。

二、調査の概要

最初にこの調査の概要について述べておく。調査が行われたのは、一九九二年六月～九月、一九九五年～二〇〇一年の四月～六月である。対象となっているのは、全国の大学、短大、専門学校等の学生である。プロジェクトのメンバーまたはその協力者である教員の講義を聞いている学生が、教室でアンケート用紙に答える形で実施された。対象学校数、有効回答数、男女比、調査した学校の宗教系か非宗教系かの別は、表1に示してある。

回答項目は一九九二年のものを参考にしながら、一九九五年以降は毎年同じ質問をする基本的項目と、年毎に少しずつ変えた項目とを設けた。ランダム調査ではないが、回答数が多いことが、偏りをかなり防いでいると考えられ、また同じ質問を七年続けたことが、そのことについての判断材料を与えてくれている。それは次のような事実である。すなわち、各家における仏壇の所持率というような、回答者の意見ではなく、ある事実に関して質問した項目で、かつ短期間ではあまり実態が変動しないと思われる事実に関する質問項目では、年度ごとの数値の変化はきわめて小さく安定しているということである。このような点から判断すると、ランダム調査ではないことによる偏りは、ほとんどの質問項目ではさほど大きくはないと考えられる。今回のように、全体的傾向を把握する上では、十分議論の根拠にできるデータである。

表からも分かるように、どの調査年度も女性が多く、また宗教系の学校に在籍する回答者（以下ではたんに「宗教系」とのみ表記する。また宗教系でない学校に在籍する回答者は、以下「非宗教系」と表記する）が一般的な比率に比べてどの調査でも多いという偏りがある。また、ここには示さなかったが、回答者には一、二年生が圧倒的に多く、八割程度を占める。全国規模での調査であり、調査校は北海道から沖縄までをカバーしているが、調査メンバーの

表1

	1992年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
有効回答者数(名)	4,005	3,773	4,344	5,718	6,248	10,941	6,483	5,759
男 性 (%)	43.0	34.7	37.5	45.8	41.6	42.4	45.0	47.5
女 性 (%)	56.8	64.8	62.1	54.0	58.1	57.4	54.8	52.2
宗 教 系 (%)	59.0	29.2	34.8	36.6	34.3	34.5	45.9	47.5
非 宗 教 系 (%)	40.7	70.8	65.2	63.4	65.7	65.5	54.1	52.5
学 校 数	32	32	42	41	43	73	42	38

半数近くが首都圏の学校で教鞭をとっているということがあって、地域的偏りは避けられなかった。

このうち、毎年一、二年生が多いことは回答結果の偏りにあまり影響を及ぼさないと考えられる。男女比の差も、分析の際、十分留意すれば、分析の妨げにはならない。地域的偏りについては、首都圏が多いことによる影響は、項目によっては考慮する必要があるが、回答者の出身高校は全国各地に広がっているので、さほど問題にしないでいいと考えている。

宗教系の学校が多くなったのは、意図的なものであり、「宗教系」と「非宗教系」の違いを比較したいという目的と、宗教系の中学、高校を卒業した回答者をなるべく多く集めたいという目的があったのである。質問によっては、宗教系と非宗教系の差が多少大きくなるのが分かったが、そうした場合、本稿では非宗教系の回答の数値によって、現代の学生の傾向を推測するという方法をとることにした。

質問項目のうち、性別、生年、所属学部・学科、学年、卒業した高校名という基本項目は毎年質問した他、宗教についての次の基本項目もほぼ同じような形で質問した。

- ① 宗教を信じているかどうか、及び宗教への関心の度合い
- ② 信じている場合、その宗教名。
- ③ 両親の信仰の有無と、信じている場合の宗教名。

④宗教的習俗（初詣、墓参りなど）への参加の度合い

以上の継続的質問項目の他に、毎回少しずつ質問内容を変えながら、広く宗教に関するいくつかの事項について質問した。ほぼ毎回質問したもののから、一度だけしか質問しなかったものまで、いくつかのケースがあるが、全体として次のような内容のことを質問項目に掲げた。

A、直接宗教に関わる質問

- ・ 宗教や宗教家に対する評価
- ・ 神仏の存在やそのイメージ
- ・ 死や死後の世界に関する関心や信じる度合い
- ・ 宗教教育の必要性や評価
- ・ 宗教とジェンダー問題
- ・ オウム真理教に関する関心

B、民俗宗教に関する質問

- ・ 神棚、仏壇がある割合
- ・ 年中行事への関わりの度合い
- ・ 葬法の変化（散骨・自然葬など）に関する意識
- ・ 占いの類の関心や信じる度合い、経験の度合い。

C、宗教的サブカルチャー、占いの類に関わる質問

- ・ 神秘現象・超常現象（スプーン曲げ、霊視、テレパシー等）とされているものへの関心や信じる度合い

・ 終末予言を信じる度合い

・ 「精神世界」関連の書籍、イベント等への関心

D、その他

・ インターネットの利用状況

・ 書籍、新聞等の利用状況

また一九九九年と二〇〇〇年には、日本と韓国とでほぼ同じ質問内容の調査が同時に行われた。⁵⁾ 韓国側の回答者は、一九九九年は一、〇一〇名、二〇〇〇年は二、〇八五名であり、また調査した学校数は、それぞれ七校、二校である（地域はソウル、プサン、テグ、チェジュなど韓国各地にわたる）。日本側に比べるとかなり少ないので、厳密な比較はできない。しかし、大きな傾向の違いは読み取ることができる。ここでは日韓比較が主な目的ではないので、論旨の展開上、参考になると考えられる数値に限って言及することにした。

これまでの報告書と、結果を分析した論文により、基本的な傾向が明らかになったが、それらはおおよそ以下のようにまとめられる。

- ① 自覚的に「宗教を信じている」と答える学生の割合は五〜七%であり、これは国際的に見ても低い数値である。
- ② 宗教、とくに教団宗教、また宗教家への信頼度も、一般に低い数値を示している。
- ③ オカルト、超常現象など宗教的サブカルチャーについては、約半数が一定の関心を抱いている。
- ④ 神仏の存在、あるいは死後の世界の存在を信じたり、ありうると考えている者の割合は五〜六割である。
- ⑤ 初詣、墓参りといった宗教的習俗を行う割合は約五割である。
- ⑥ 中等教育で宗教教育を受けた者とそうでない者を比較した場合、ほとんどの項目で、大きな相違がみられない。

⑦男女差は、占いに関わる項目とジェンダー問題に関わる項目で顕著である。

この他にも、どの都道府県の学校の回答者であるか、あるいはどの都道府県の高校を卒業したかによる違いを比べると、たとえば宗教習俗への関わりの度合いにおいて若干の違いが見られたりするが、こうした点はまだ細かくは分析されていない。

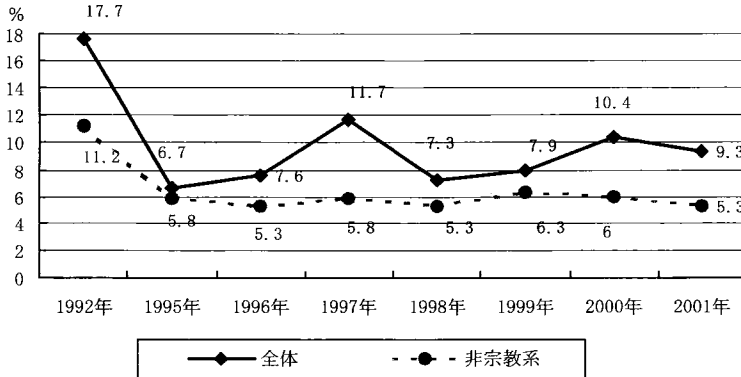
こうしたすでに明らかにされたことを踏まえながら、本稿では、上記のA～Cに関して、回答結果を再度比較検討し、冒頭に述べた視点から分析していく。また、回答結果は男女別、宗教系、非宗教系の別、さらに信仰の有無によって比較することも必要であるが、紙数の関係でそれは別稿にゆだね、とくに言及する必要がある場合に限り、数値を示すことにする。

三、否定的宗教イメージの広まり―教団宗教、制度宗教への不信の深さ

まず、直接宗教に関わる事柄に関して、信仰をもつ割合や、宗教へのイメージを確認しておこう。宗教を信じる者の数値は、一九九二年と九五年以後とは大きな違いがある。(図1参照)九二年には非宗教系の学校の学生でも、「特定の宗教を信じている」と答えた者が一・二%であった。しかし一九九五～二〇〇一年では、五～七%の間を推移している。回答の選択肢が九二年は「特定の宗教を信じている」であり、九五年以降は、「現在、信仰をもっている」というふうに変ったので、それを考慮する必要があるかもしれない。しかし、両者を比べると、「特定の宗教を信じている」という表現が、「信仰をもっている」よりとくにゆるやかな意味とは考えられないので、実際にこの間に宗教を信じる学生の割合が減少したと考える方が自然である。

そして、その間に若い世代の宗教観を大きく揺るがすような事件が起こっている。すなわち一九九五年三月のオ

図1 信仰をもっている者（全体・非宗教系）



ウム真理教による地下鉄サリン事件である。

地下鉄サリン事件を代表とする一連のオウム真理教による事件が、宗教イメージの悪化に大きな影響を与えたことは、一九九九年の調査結果の分析ですでに明らかにされている。この年の調査では、「あなたの宗教に対するイメージは、オウム真理教事件のおこったことでどうなりましたか。」という問を設けた。「大変よくなった」は〇・七%、「少しよくなった」は〇・八%と、それぞれ一%に満たない。「かわらない」が二〇・九%と約二割、「少し悪くなった」が二・八%、「大変悪くなった」が五五・五%と、イメージの悪化は八割近くに及ぶ。半数以上が「大変悪くなった」と答えているわけだから、事件によるイメージの悪化の程度がはなはだしかったといわざるを得ない。

オウム真理教事件の影響は、とくにこれを十代で経験した世代では、短期間で消え去るものではないと考えられるが、一九九七年と九九年のオウム報道の関心を聞いた結果がそれを示している。(表2参照) 時間の経過とともにやや関

表2 オウム真理教報道への関心

	97年	99年
非常に関心をもっている	12.0%	11.7%
多少関心をもっている	58.4	52.8
あまり関心をもっていない	18.3	22.5
関心はない	11.1	12.3

心が薄れているが、それでも九九年に、約一割が非常に関心をもっており、多少関心をもっている者と合わせると六割以上となる。

オウム真理教事件により宗教に警戒を抱くようになり、宗教を信じる人が減少したとしても、宗教そのものの必要性についてはどう考えているであろうか。一九九五年～二〇〇〇年の毎年、合計六回にわたり「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ。」という意見をどう思うかについて質問している。この種の間には、宗教系と非宗教系とは差が出てくる。この場合、肯定的に答える比率が宗教系の方が高く、年により数%から一〇%以上の差がある。そこで比較的安定している非宗教系でみてみる。(表3参照) 肯定と否定がほぼ半々ということが分かる。また、自分が宗教を信仰している者は肯定する割合が高くなる。⁶⁾

「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」と答えた人に対して、その関心の対象になっているものを、選択肢を掲げて回答してもらった。二〇〇一年の回答で多い順に並べると表4のようになる。

表3 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ」と思うか

	95年	96年	97年	98年	99年	00年
++	16.0%	14.8%	14.2%	15.9%	16.1%	16.0%
+	35.7	32.0	32.2	34.1	31.8	33.2
-	25.0	25.0	25.7	23.3	27.1	27.2
--	23.3	27.7	27.4	25.8	24.6	22.4

(++は「そう思う」、+は「どちらかといえばそう思う」、-は「どちらかといえばそう思わない」、--は「そう思わない」を示す。以下、とくに断らない場合は同じである)

表4 関心の対象

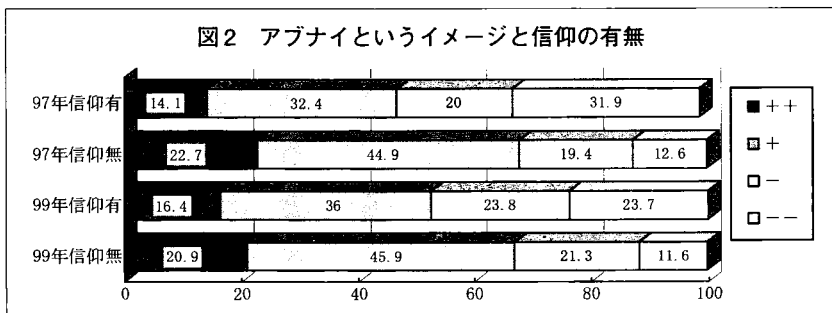
	95年	96年	97年	98年	99年	00年	01年
神社や仏閣、教会などの見学	33.3	45.4	42.6	44.1	46.0	50.6	45.9
聖書や仏教経典などの宗教書	37.9	45.9	42.5	42.3	43.9	47.7	43.0
宗教教団や世界の宗教などを扱ったテレビ番組	48.8	34.1	36.6	31.5	33.1	35.3	36.0
宗教を解説した本	-	-	36.0	35.1	35.1	31.8	34.0
宗教を扱った小説やノンフィクション	23.1	25.1	27.5	28.1	27.5	28.8	29.1

九五年は「宗教教団や世界の宗教などを扱ったテレビ番組」が五〇%近くと多いが、これはオウム報道が盛んな時期であり、オウム真理教報道への関心が反映されている可能性が高い。翌年からその値は三〇%台で推移するようになっていく。宗教施設の見学や宗教書を読むことへの関心は、比較的高いことが言える。直接宗教の雰囲気に触れたり、あるいは宗教書を自分で読むことには平均して四〇五割の関心が示されている。宗教に関心があるという回答者は全体の二五〜三〇%程度を占めるので、こうした関心を示す人も全体からみても、一〇数%いることになる。「信仰をもっている」と答えた人は、これらに関心を示す割合も高いと推測されるので、これを合わせると、少なくとも二割程度は宗教施設の見学や宗教書への関心を抱いていると考えられる。またこうしたものは、宗教家があまり介在しない場面であるという点にも留意したい。

オウム真理教事件は宗教のイメージを悪化させたことみなせるが、それ以前から宗教に対するイメージは全般的にあまりいいものではないと指摘されていた。宗教一般に対するイメージを確認するため、「宗教にはアブナイというイメージがある」かどうかを、九八年、九九年に質問してある。この間には自分自身が信仰をもっている場合とそうでない場合とでかなり異なる可能性があるため、それを対比させてみた。(図2参照)

これを見ると、信仰があるものでも約半数がアブナイ、あるいはどちらかといえ

図2 アブナイというイメージと信仰の有無



ばアブナイと思っていることが分かる。信仰がない者の場合、それは約三分の二に達する。アブナイという表現が否定的な意味しかもたないかどうかは、断言し難い。ある種の魔力のようにとらえている可能性もあるかもしれない。だが、少なくとも社会に正當に位置付けられる文化的存在として位置付けられてはいないと読み取るべきであろう。

なお、本人は信仰していなくても、友人が信仰をもっている場合がある。友人で信仰をもつ人がいる割合は三割前後である。そして、そのことで友達つきあいに影響があるかどうかを調べたが、「他の友人と変わらない態度で接している」という回答が約七割である。すでに友人である人の信仰については、とくに問題視しない傾向がうかがえる。

宗教というやや話が抽象的に受け止められる可能性がある。そこで宗教家、宗教団体ともう少し限定して質問するとどうなるであろうか。宗教家への評価を判断する質問としては、一九九二年の調査で、「牧師、神父、僧侶、神主などをゲストに呼び、話を聞く」ことが、中学校や高校の授業の一環として、あつてもいいか、それとも必要ないと思うかを質問した。

すると「あつてもいい」が三六・二%、「必要ない」が五七・六%と、必要性を認めない方がずっと多い。ちなみに、「仏教、キリスト教、イスラム教など、主要な宗教についての基礎的知識を教わる」は、それぞれ六五・六%と二八・三%で、あつてもいいと答える人が増えている。さらに「福祉活動や、社会文化活動等を熱心にやっている人の話を聞く」は、七三・五%と二〇・四%であり、福祉活動をやっている人等の話に比べると、宗教家の話は半分ほどの必要性しか認められていないということである。

宗教家にもいろいろある。漠然と宗教家ではなく、「すばらしい宗教家がいたら、話を聞いてみたい」と思うかど

うかという形で、九五年〜九七年に質問したが、表5のような結果となった。これは全体の数値であり、宗教系の学校と非宗教系の学校を比べると肯定・否定の割合に一〇%以上の差が出る。しかし、宗教系でも否定派の方が過半数を占める。「すばらしい宗教家」という限定がついてもこうした状況である。

二〇〇〇年には、もつと直接的に宗教家への若い世代の評価を得るため、「一般に宗教家（神主・僧侶・神父・牧師など）は信頼できる」と思うかどうかを質問した。（表6参照）これは宗教系と非宗教系で若干の差が見られるが、そう大きくはない。宗教系でも否定派（以下「どちらかといえばそう思わない」、または「そう思わない」と答えた回答者をあわせて「否定派」と表記する）が過半数を占める。つまり宗教家は信頼できないと考える学生の方が多いのである。非宗教系では三分の二以上に達する。「信頼できる」と思う回答者の割合は、五%にも満たない。宗教を信じているという人の割合にも及ばないことになる。伝統宗教やキリスト教に関係する宗教家が例示してあつてこの結果である。

ちなみに同年韓国で行った調査では、信頼できると思う回答者は一七・四%であり、肯定派（以下「そう思う」もしくは「どちらかといえばそう思う」と答えた回答者をあわせて「肯定派」と表記する）は、五九・一%と約六割に達する。日韓の差は歴然としている。こうした宗教家への信頼度の薄さが、宗教不信といわれる一つの大きな要因として想定できる。

表5 すばらしい宗教家の話を
ききたいか

	95年	96年	97年
++	18.5	15.0	15.9
+	22.3	21.1	20.8
-	24.3	23.0	24.0
--	34.8	40.6	38.9

表6 宗教家は信頼できるか

	[全 体]	[宗教系]	[非宗教系]	[韓 国]
1. そう思う（++）	4.3%	5.6%	3.3%	17.4%
2. どちらかといえばそう思う（+）	29.5	32.0	27.4	41.7
3. どちらかといえばそう思わない（-）	37.0	35.2	38.6	27.6
4. そう思わない（--）	28.0	26.3	29.5	7.7

二〇〇一年には、異なった角度から質問した。「人生に悩んだ時に、相談したいと思う宗教者」を、「仏教の僧侶」、「キリスト教の牧師・神父・シスター」、「神社の神主」、「街の占い師」、「その他の宗教家」から複数回答で選んでもらった。(表7参照)全体で比べて多い順に並べてみたが、「キリスト教の牧師・神父・シスター」がもつとも多く、二割強である。非宗教系で見ると、僧侶や神主は街の占い師に及ばない。なお、この回答内容は、宗教系、非宗教系よりも男女差が顕著であったので、参考のために掲げた。女性は、キリスト教と占い師により強い信頼を置いているという傾向が明らかである。

宗教家というカテゴリーではなく、宗教団体として質問したらどうなるであろうか。一九九五年には、「宗教団体はたいてい金集めに熱心だ。」と思うかどうかを質問した。「そう思う」が三六・七%、「どちらかといえばそう思う」が四〇・八%と、この考えに肯定派が四分の三以上になっている。

また、若者が経験することが多いと思われる街頭での布教について、一九九五、九六、九八、九九年の四回質問した。すなわち、「街頭布教は法律によって規制すべき」と思うかどうかという問いである。(表8参照)宗教系と非宗教系では、後者が若干批判的であるが、非宗教系の数値を示した。「法律によって規制すべき」というのは、こうした布教形態に対するかなり強い批判になっていると考えられるが、六割前後が肯定派である。

では、実際にどの程度勧誘経験があるのだろうか。二〇〇〇年には「あなたは見知らぬ人から宗教の勧誘を受けたことがありますか。」という質問をした。回答者六、四八三

表7 相談したいと思う宗教家

	[全 体]	[男 性]	[女 性]	[宗教系]	[非宗教系]
キリスト教の牧師・神父・シスター	21.4%	16.4%	25.9%	22.6%	20.3%
仏教の僧侶	11.8	12.8	11.0	13.3	10.5
街の占い師	11.5	8.5	14.2	11.6	11.3
神社の神主	5.8	6.9	4.9	5.8	5.9
その他の宗教家 (具体的に)	3.3	4.3	2.3	5.1	1.6

表8 街頭布教は法律によって規制すべき

	95年	96年	98年	99年
++	25.7%	28.1%	32.0%	30.5%
+	34.0	29.0	36.4	35.9
-	25.3	25.9	22.1	21.6
--	14.9	16.5	9.2	10.8

名のうち、五一・六%があると答えている。受けた宗教を多い順に五団体を挙げると次の通りである。(なお、勧誘を受けた経験については二つまで挙げてもらった。)

- ① エホバの証人 七四七人
- ② キリスト教 三九四人
- ③ 創価学会 八五人
- ④ 法の華三法行 五七人
- ⑤ 幸福の科学 五四人

このうち二番目に多い「キリスト教」の大半は、エホバの証人である可能性が高い。また、団体名が不明であるという回答が、延べ二、〇八九ケースあった。勧誘を受けた時代は高校時代が四七・六%と最も多いが、これは回答者が大学にはいったばかりの人が多くというところを考慮しなくてはならない。場所としては、多いのが、駅周辺(路上)の四七・六%と、自宅の四二・〇%である。大学内は二・一%、電話は三・〇%と少ない。

その対応法であるが、「無視した」が五一・四%、「二応話を聞いた」が三九・九%で、「相手の話を聞いて反論し議論になった」は四・二%である。関心をもったのは一・一%に過ぎない。宗教団体から勧誘を受けるといふ経験は半数近く、その場合、半分ほどは無視しているわけだが、一応話を聞く人も四割いる。そうした経験も宗教イメージの形成の一角を形成していると考えられる。

また政治と宗教団体の政治活動については、一九九九年に「特定の政党の支持はよくない」と思うかどうかを質問した。「そう思う」が五〇・二%で、「どちらかといえばそう思う」が二四・〇%であった。ここでも約四分の三

が、宗教団体が特定の政党を支持するのはよくないという考えについての肯定派である。

以上で明らかのように、学生たちは宗教団体がビジネス化していると感じており、また宗教団体と政治との関わりには否定的見解を示す者が、約四分の三を占める。

では、宗教団体が、自分たちにとって迷惑と感じられるとき、相談窓口のようなものを探めているのだろうか。九八年と九九年には「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要」と考えるかどうかを質問した。(表9参照)「両年とも」思う方が七割、「どちらかといえばそう思う」を含めると、肯定派は九割を越している。

一連の質問のなかで、もっとも高い数値となった。宗教的トラブルというのは、若い世代にとって、深刻な問題になっている可能性がある。路上や自宅での勧誘、マスメディアの報道が宗教「経験」の大半を占めていて、そこからは否定的なイメージが形成されやすいことが推測できる。

しかし、宗教そのものの存在意義を否定する人が圧倒的多数ではない。宗教団体や宗教家への信頼ではなく、信仰の対象となる神仏あるいは靈魂を信じるかどうかということになると、またその割合は異なってくる。一九九九年から二〇〇一年にわたり、神仏や靈魂の存在についてどう考えるかを質問した結果を参考にしてみる。(表10参照)

これを見ると、おおよそ五割から六割は神仏や靈魂の存在に対して、少なくともありうると考えている。靈魂を信じる割合が一番高く、仏が一番低い。外国からは仏教国と位置付けられることが多い日本であるが、若い世代の感覚はこのような現状であることもおさえておかねばならない。神仏の存在を信じる割合は、宗教系ではこれより四〜五%肯定派が増えるが、靈魂ではほとんど差がない。つまり靈魂の存在を信じるかどうかは、信仰があるかどうかとはあまり関係がないということである。

表9 宗教的トラブルの公的相談窓口の必要性

	98年	99年
++	70.0	70.0
+	21.6	20.8
-	4.1	3.7
--	4.1	4.4

表10 神・仏・靈魂の存在（非宗教系）を信じる割合

①神の存在

	1999年	2000年	2001年	1999年韓国	2000年韓国
++	19.0	17.4	13.7	32.7	32.4
+	33.3	34.2	32.5	42.6	40.7
-	32.6	33.9	35.8	19.0	19.2
--	14.3	14.2	14.8	3.5	3.7

②仏の存在

	1999年	2000年	2001年	1999年韓国	2000年韓国
++	15.2	14.0	10.5	17.5	20.9
+	33.8	35.7	31.5	49.6	44.7
-	35.7	35.4	39.1	21.6	22.7
--	14.4	14.3	14.8	7.6	6.7

③靈魂の存在

	1999年	2000年	2001年	1999年韓国	2000年韓国
++	19.4	19.2	15.6	33.6	31.2
+	40.3	41.3	43.0	50.0	45.8
-	27.5	27.9	27.5	10.3	14.7
--	12.0	11.1	11.4	2.6	2.9

(この表では、++は「信じる」、+は「ありうらと思う」、
-は「あまり信じない」、--は「否定する」を意味する)

なお、韓国における一九九九年と二〇〇〇年の結果を参考のために記しておいたが、一〇〜二〇%程度の差が出ていることが分かる。

以上をまとめるなら、宗教というイメージはオウム真理教事件を契機に悪くなった。また宗教家は信頼度が低く、また彼らの話を聞きたいという要求もあまりない。宗教団体の経済活動、政治活動には批判的な者が多い。こうした傾向が指摘できる。

これらが必ずしも実体験によるものではないこともアンケート結果から分かっている。勧誘体験なども確

かに影響していると考えられるが、むしろマスメディアの影響が大きいと言える。宗教が否定的にとらえられるような情報の多くが、主にマスメディア、とくにテレビを通して頻繁に流されているからである。しかし、情報ルートがどうあれ、結果的にこのような宗教観が学生層に描かれているという事実は確認される。

表11 家庭祭祀

	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
神 棚	46.6%	45.1%	44.4%	45.3%	37.4%
仏 壇	49.4	47.3	48.1	47.4	45.6

四、比較的安定して維持される民俗宗教

(1) 宗教的習俗への関わり

前節の分析から、宗教家、あるいは宗教団体に対するイメージは、あまりいいものではないことが分かった。これは宗教社会学という組織宗教、制度宗教のレベルを主として対象にしたことになる。では民俗宗教と呼ばれるようなものに対する意識や態度はどうであろうか。宗教的習俗と占い類とに分けてみていく。

まず事実的な事柄からおさえておきたい。家庭祭祀を象徴するものとしての神棚、仏壇の所持率からみていく。神棚、仏壇が家（一人住まいの場合は実家）にあるかどうかについては、一九九七年から二〇〇一年まで質問した。これは宗教系の学校を含めると、年毎の変化がやや大きくなるので、非宗教系の学校で集計してみた。（表11参照）二〇〇一年の神棚が急に減っている。他の数値が安定しているの、なぜ二〇〇一年だけ減少したのか、これだけでは原因が分からない。全体でみても、仏壇、神棚ともほんの少し減少傾向が見れないでもないが、もう少し長いスパンでみなければならぬことである。ともに四〜五割程度であるが、仏壇の方がわずかに高い所持率である。

次に初詣、墓参りという習俗的な儀礼を行う割合である。とくに墓参りなどは家族とともに行うものである、積極的な実践かどうかは不明である。だが行っている以上、本人の意志が介在しているし、宗教的習俗はもともと周りがやるからやるという側面を多少なりとももっている。それぞれ直前の行事への参加の有無を聞いた結果を示した。（表12参照）いずれも非宗教系で集計したが、あまり変動はなく、両者ともほぼ五割、一般に初詣を行う方がわずかに多いという結果である。

表12 宗教習俗

①初詣

1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
50.0%	52.4	49.3	49.2	51.3	48.6	50.4

②墓参り

1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
46.0%	50.1	51.8	51.0	50.9	52.7	48.2

全体の数値を示した。こうした社会的習慣には寛容であり、いずれも約半数がまったく問題ないと考えており、こうしたことをあまりおかしいとは思わない人は、約四分の三である。ただ、二〇〇〇年には僧侶を呼ぶのがおかしいと思う回答者がやや増えている

この他、宗教的習俗に関しては、一九九六年に、節分のときに家族とどのようなことをしたかを質問した。これは一人住まいと家族と同居では条件が異なるので、家族と同居している学生の回答でみるべきである。「家族と豆まきをした」と答えたのが三四・七%、「家族と神社または寺院に行った」と答えたのが〇・五%だった。家族で行う宗教習俗ということにはなっていないと理解できる。

日本人の宗教行動は無原則のように見えることがある。キリスト教徒でないのに、キリスト教会で結婚式を挙げたり、日ごろ、自分の宗教には頓着しないのに、葬式のときはやはり仏式が圧倒的に多いからである。「クリスチャンでない人が、キリスト教会で結婚式をあげるのはおかしい。」と思うか、また「ふだん信仰のない家が、葬式のときだけ僧侶（お坊さん）をよぶのはおかしい。」と思うかを質問した。いわば宗教心を欠いた宗教儀礼の実施についての意識である。（表13参照）

この質問には宗教系と非宗教系の差がほとんどみられなかったので、

表13 宗教心を欠いた宗教儀礼

①非キリスト教徒のキリスト教会での結婚式

	98年	99年
++	9.5%	8.2%
+	18.2	16.4
-	27.7	25.5
--	44.3	48.6

②葬式のときだけ僧侶

	98年	99年	00年
++	10.3%	8.3%	15.6%
+	17.4	14.8	19.2
-	29.5	28.4	34.5
--	42.4	47.2	30.3

る。宗教系と非宗教系とで数値がほとんど変わらないのは、それまでと同じなので、これがあ
変化を示しているのかどうかは、今の段階では判断がつかない。

従来の習俗的なものは受け入れるという傾向が浮かびあがってくる。では葬儀についてはどう
であろうか。一九九九年には、あまりリアルな問ではないかもしれないが、自分が死んだときの
葬法として何を望むかを質問した。神道式、仏式、キリスト教式、その他の宗教による式、宗教
色のない式、葬式をやらない、どれでもいい、という選択肢を設けた。もともと多いのはどれで
もいいで、三七・八%、次いで仏式が二七・七%、宗教色のない式が一四・五%、葬式をやら
ないが一・一%であった。「宗教色のない式」と「葬式をやらない」を合わせると二六・六%で
あり、ほぼ仏式に近くなる。伝統的葬法へのこだわりは薄れていると判断されるが、こうした意
識が、実際にどれほど葬送習俗の変化をもたらすものかは、予測できない。

そこで、今後の変化を探る一つの試みとして、散骨・自然葬についての意識を参考にしてみ
る。かなり注目すべき結果となっている。(表14参照) 散骨・自然葬を親が望んだ場合にそれに従
うかということと、自分の葬法をして、それを望むかという二つのタイプの質問を用意した。(ただし、九五年と九
六年は散骨・自然葬を知っているかどうかを質問し、知っている者に対して、どうするか質問している。そして九
七年以降は「従来のお墓と異なり、野山や河川、海などに遺灰をまく「散骨・自然葬」と呼ばれるものがあります」と説明
した上で、それに対する意見を聞くという違いがあり、厳密には同じ質問のやり方ではない)。

親が望んだ場合は八〜九割が親の望みに従うと答えている。これに対し、自分の場合には、三割前後が散骨・自
然葬でもいいと考えている。これが葬儀形態への意識の変化を示しているかどうかは、将来の調査を待つかない。

表14 散骨・自然葬を望むか

	95年	96年	97年	98年	99年
親	78.2%	80.1%	—	87.5%	89.9%
自分	31.0	31.8	30.8%	32.3	30.6

*97年度は親についての質問はしなかった

表15 やったことのある占い

96年

「こっくりさん」(または「エンゼルさん」「キューピットさん」)	69.0%
店などでコンピュータ占いをしたことがある	67.3
血液型による性格判断などの本を買ったことがある	31.6
星占いをするために定期的に読む本や雑誌がある	12.7
街頭や店でプロの占い師に手相、人相などを占ってもらった	12.4
店などでプロの占い師にタロット占いをしてもらった	6.2
お金を払って、姓名判断をもらった	9.5

96年

神社・仏閣のおみくじをひいたことがある	83.7%
学校や家などで友達と「こっくりさん」	55.3
店などでコンピューター占いをしたことがある	46.5
一日の運勢をみるために定期的にみるテレビ番組がある	32.1
星占いをするために定期的に読む本や雑誌	20.5
街頭や店でプロの占い師に手相、人相	10.8
店などでプロの占い師にタロット占い	4.1
インターネット上の有料の占いをしたことがある	2.4

15参照)

占いの類のうち、おみくじなどは、宗教習俗、あるいは宗教的行為に含めうる。また事柄によっては、宗教的サ
 ブカルチャーとして考えるべきものもある。ただ質問としては占いとして一括して質問したので、データはここに
 まとめておく。占いの種類によって答えは大きく異なるが、通例男女の意識の差が大きく、女性の方が信じたり、
 実践したりする割合が高い。また事柄によっては、ブームの影響とかマスメディアの扱いによる影響で左右される
 度合いが大きい。

占い類をどれくらいの学生が行っているかを、一九九六年と九九九年に質問している。数値の高い順に並べた。(表

(2) 占いの類への関心

表16 占いの信頼度

1995年

	++	+	-
血液型による性格判断	12.1	55.8	29.4
手相	11.2	59.3	24.0
姓名判断	5.9	53.1	34.8
生まれ月による星占い	5.3	60.4	30.9
コンピュータ占い	1.7	36.8	53.0

1999年

	++	+	-
血液型による性格判断	12.2	46.7	34.5
手相	8.6	55.2	27.2
姓名判断	7.6	47.9	35.1
生まれ月による星占い	5.7	50.0	37.1
タロット占い	4.3	41.4	37.6
神社・仏閣のおみくじ	2.9	45.9	44.4
こっくりさん	2.6	21.5	55.8
コンピューター占い	1.3	30.3	52.8

2000年

	++	+	-	?
動物占い	18.7	48.5	22.1	10.4
血液型	13.0	49.8	30.1	6.7
手相	9.3	55.3	23.7	11.3
風水	7.9	49.7	23.7	18.3
姓名判断	7.0	49.2	31.0	12.5
ジンクス	6.1	48.3	34.2	11.0
西洋星占い	3.7	46.7	28.2	21.1
カード占い	2.6	41.4	39.5	16.1

(ここでは、++は「かなり当たると思う」、+は「当たることもあると思う」、-は「当たらない」、?は「関心がないのでどのようなことをするのかわからない」を意味する) 数値はいずれもパーセンテージ

こっくりさんは宗教的サブカルチャーと位置付けた方が適切であるが、経験者は多いことが分かる。⁸⁾ おみくじは初詣等の多さから考えると、この数値は納得できるであろう。伝統宗教へのこうした形での関わりはまだ深いと言える。真剣に占う人は街頭などで占い師に占ってもらおうと考えられるが、その割合は一割前後である。宗教を信じる割合よりやや高いことになる。

二〇〇一年にはホームページのサイトの中で占い関連のサイトに関する関心の度合いを調べたが、二一・二%が関心をもっていると答えている。これは他の宗教関連のサイトに比べるときわだつて高い数値である。ちなみに、「癒しに関するホームページ」は四・九%、「オカルト・超常現象に関するホームページ」は四・五%、「宗教団体の

ホームページ」は二・七％である。また、こうした宗教関連のホームページに関心がないと答えた者は四五・九％であった。

では占いをどの程度信頼しているのだろうか。これについては、一九九二年、九五五年、九九九年、二〇〇〇年に質問した。一九九二年の調査では、星占いについての品質問している。結果は、「基本的に信じている」一八・二％、「信じているわけではないが、ありうることだとは思っている」二五・一％、「どちらかといえば、疑わしいと思っている」二二・三％、「信じていない」三三・三％であった。四割強が肯定派である。一九九五年と九九九年、それに二〇〇〇年には、当たるかどうかという聞き方をした。これは項目によってだいぶ異なる。大半は当たることもあるといふ程度のゆるやかな信頼度である。(表16参照)

これらと比較すると、手相、姓名判断という伝統的な占いは、信頼度の数値が比較的安定している。「かなり当たると思う」割合は、手相が一割程度、姓名判断がやや低く六〜七％程度である。この数値は対価を支払ってみてもらう占いの割合に近い。つまり真剣に占いをする人は約一割で、伝統的占いに頼り、当然ながら対価を支払うという形が想定できる。

コンピュータ占いは信頼度が低く、やったことがある人は多いが、遊びの範疇にはいると考えられる。また風水や動物占いは、一種のブームが存在した時期であり、数値の高さはそうした要因を考慮しておく必要がある。血液型による性格判断は、伝統的占いよりやや高い数値である。占いと性格判断を同列に扱うことはできないが、占いの信頼度の位置付けを知る上では参考になるだろう。

またかなり当たると思っている人の割合は、動物占いでも一八・七％で、多くが数％から十数％である。しかし、当たることもあるという人まで入れると、ほとんどの項目で五割を超える。つまり占いの類には、多くの学生が漠

表17 占いに関する男女比較

	女性	男性
占い師による 手相、人相	13.6%	4.6%
星占いのため の本や雑誌	29.7	10.8

当たるとおもうかどうか(手相)

	女性	男性
++	11.1	6.2
+	66.1	45.2
-	17.5	35.7

当たるとおもうかどうか(星占い)

	女性	男性
++	7.2	4.2
+	61.6	39.0
-	27.8	46.1

然とした信頼をもっているということになる。

男女差が大きいことについては、二、三具体的な数値を示すにとどめる。一九九九年度は一〇、九四一名に質問しているので、その結果を表17に示しておく。手相・人相を占い師に見てもらった割合も星占いのために雑誌を買う割合も女性は男性の約三倍である。当たるかどうかにについても当たると思う割合は二倍近い。顕著な差である。以上

のことから、占いへの関わりや信頼の度合いは、占いの形態によつて多様であるが、ある程度真剣に関わる割合は、一割前後であるとみなせる。また占いへの信頼性とか必要性をゆるやかに感じている割合は、過半数になるとみなせる。

五、宗教的サブカルチャーへの多様な信頼度

宗教的サブカルチャーというのは、やや曖昧な概念である。一九七〇年代の半ば以降から、若者の間に、オカルトブーム、あるいは神秘・呪術ブームが起こったとされ、それまで非合理とされていた事柄が復活したかのような現象が多く見出されることが宗教社会学では指摘されている。とくに一九七四年のユリゲラーの来日以後の超能力ブーム、あるいはエクソシストという映画のヒットは、それを象徴するできごととされる。

この頃から小学生、中学生を中心に、学校で「こつくりさん」がブームになった。こうしたものは、組織宗教、

制度宗教とほとんど関わりなく生じた現象であるが、神秘的世界、霊的世界への関心と呼応するものであり、宗教的関心と交錯しながら展開してきている。若い世代が好奇心をもち、メインの文化からは多少逸脱したこうしたものを一応宗教的サブカルチャーと総称できる。しかし、具体的に何が宗教的サブカルチャーに属するかとなると、明確な規定はない。メインカルチャーとサブカルチャーの境界線はもともと曖昧だからである。

ただ、終末論が流行ったり、超能力ブームがおこったり、霊界への関心が生じたりしている状況を、宗教的サブカルチャーという視点から整理しておくことは、現代の若者の宗教性についての論議には欠かせないと考える。⁹⁾

ではこうした宗教的サブカルチャーに対する関心の度合いは、学生の意識にはどのように読み取ることが出来るだろうか。宗教的サブカルチャーは、社会への定着度が弱いために、一般にマスメディアの報道姿勢とか、ブームの勃発によって、それらに対する肯定あるいは否定といった評価は、かなり変化しやすいと考えられる。そうしたものの事例として、宜保愛子の霊視と、ノストラダムスの終末予言を信じるかどうかを質問した結果を見てみる。

宜保愛子は一九九〇年代当初はテレビ等に頻繁に登場しており、放映のスタンスも、あたかも霊視が事実であるかのように構成されたものがほとんどであった。したがって、一九九二年の調査時は、その霊

図3 宜保愛子の霊視を信じるか

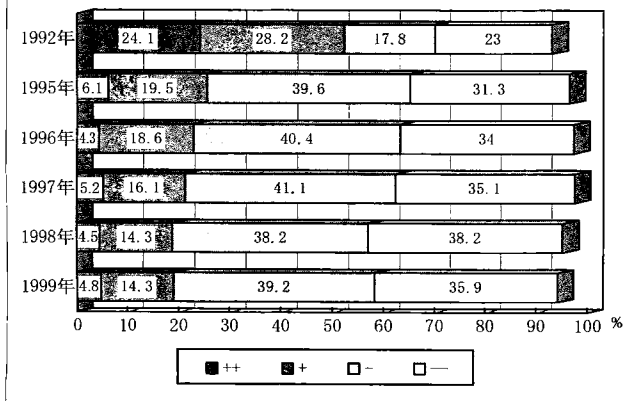


表18 靈感・霊視を信じるか

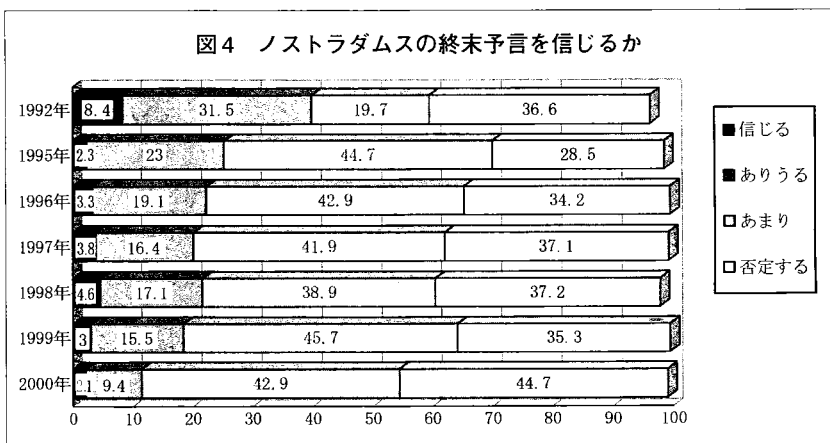
	宗教系	非宗教系
++	20.7	22.3
+	40.8	42.0
-	26.2	23.4
--	11.4	11.7

視の肯定派が五割を越していた。しかしその後批判的報道も増え、またオウム真理教事件も関係してか、テレビがこの種の番組を一時期自粛したかに思える時期があった。その時期、すなわち一九九五年以後しばらく、信じる割合は年毎に減少している。(図3参照)

ところで、「宜保愛子の霊視」というふうにと定すると、それは宜保愛子個人への評価を含んでしまう。そこで二〇〇〇年には「霊視・靈感」を信じるかどうか、という一般的な質問の仕方にした。すると数値はきわめて高くなった。しかも非宗教系の方が数値が高く、肯定派が六四・三%となった。(表18参照)

ノストラダムスの終末予言については、一九九九年に大変なことが起こると解釈され心配していた若者が実際にいたわけだが、この予言が終末として喧伝されていたため、そのことがどう影響するかが注目された。二〇〇〇年まで六回質問したが、予言の年が近づくにつれて肯定派はむしろ減少気味である。(図4参照) 予言がはずれた(?) 二〇〇〇年に、肯定派は一段と減少したが、それでも一割強が肯定派である。サブカルチャーのそれなりの根強さを示していると考えられる。

図4 ノストラダムスの終末予言を信じるか



一九九九年の調査時は、その予言された時期の直前であったので、いくつかが細かい質問をした。「終末に起こることとして、あなたの身の回りであらうな事柄」を複数回答で聞いたが、表19のとおりであった。

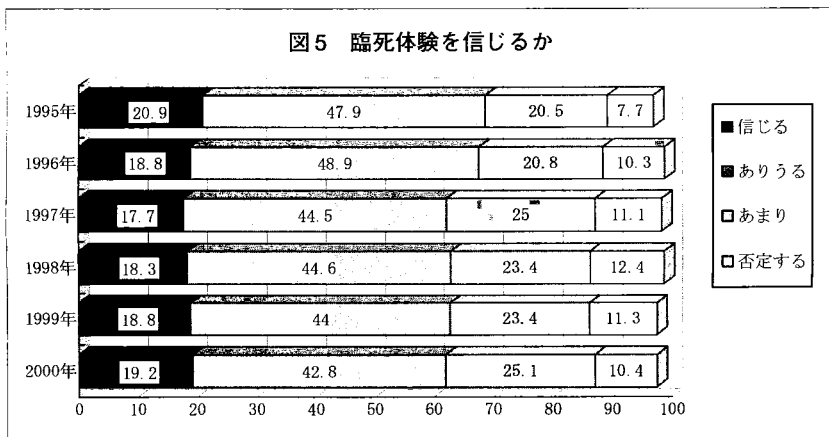
宇宙人の攻撃を除けば、どれもある程度可能性があるものである。いろいろな説が学生たちの周りでも飛び交ったことが知れるのである。彼らが記憶にとどめているのは、核戦争とか、隕石の衝突といった地球規模での破滅的事態である。

ところで、靈感や霊視はつきつめていけば、目に見える現実の世界以外の存在を信じる態度とつながっている。唯物的な考えとは矛盾するものである。死とか死後の世界という観念とも密接に関わっている。死や死後の世界に関わる事柄は、宗教学では通常宗教のもっとも根幹に関わるテーマとして設定されるが、この調査での臨死体験、前世・輪廻転生に関わる意識は、むしろ宗教的サブカルチャーと関連付けた方が議論しやすい。若い世代は宗教の教えや宗教家から死や死後の世界についてのイメージを形成することは少なく、テレビ、漫画、アニメなどを通して形成することが多いと考えられるからである。前世・生まれ変わりを信じる人の割合が、死後の世界を信じる人の割合よりもつねに数%高いという、よく考えるところじつまが合わないような回答結果も、これらがサブカルチャーに深く関係した事柄であると理解しないと説明しづらい。

死やそれに関連した事柄に若い世代は関心を高めているということは、一九九〇年代以降、しばしば指摘されてきたことであるが、それを裏付けるような数値が見出される。臨死体験を信じるかどうかは、一九九五年から二〇〇〇年まで質問したが、非宗教系で、肯定派は六二―六八%の間はかなり高い数値になる。(図5参照)信じるとい

表19 終末に起こるとされたこと

何が起こるか	%
核戦争	53.2
隕石の衝突	49.9
異常気象	32.1
大地震	29.5
宇宙人の攻撃	16.6
火山の爆発	13.3
その他	10.6



う人の割合も二〇%前後である。

宗教系か非宗教系による違いは見られないことも注目すべきである。宗教系の方が肯定派がわずかに多い年と、非宗教系の方がわずかに多い年とがある。また、信仰の有無とも関係が薄く、宗教にまったく関心がない者は、こうした事柄への関心もやや低いという程度で、信仰の有無などとは独立した事柄と分析できる。臨死体験も九〇年代には話題になり、マスメディアでもこれを肯定的にとらえる立場からの報道が多く、宗教研究者がテレビでこの現象の可能性を示唆する発言をするケースもあった。臨死体験をイメージ化して放映することもあり、こうした報道の影響もいくらかあったと推測される。

また、前世・生まれ変わりについても、一九九五～二〇〇〇年に質問したが、臨死体験よりは肯定派が数%程度低いものの、五～六割程度になる。信じる割合も一五～一八%の間である。(表20参照) 臨死体験同様、比較的安定した数値を示している。死や死に関わる事柄への関心が安定した数

表20 「前世・生まれ変わり」を信じるか

	95年	96年	97年	98年	99年	00年
++	15.7	17.9	17.4	16.9	17.3	17.0
+	36.4	39.3	37.4	36.7	37.0	37.5
-	28.2	28.1	29.6	28.9	29.2	29.7
--	11.7	14.3	14.9	16.7	15.5	14.8

値を示していることは、宗教習俗と同じく、これが見えない文化コードのような意味をになつてい
 るのかもしれない。

精神世界という用語は一九七〇年代から広く使われ始め、書店での分類カテゴリーとしてはかなり定着しているといえ、まだサブカルチャー的な要素が強いと考えられる。これに関連した意識を探るため、一九九七年には、書店の「精神世界」のコーナー、「癒し」をあつかった本や雑誌の特集にどれほどの関心があるかを質問した。(表21参照) 精神世界の方が関心の度合いがやや高く、「非常に関心がある」という割合は数%であり、「多少関心がある」を加えると三割少々である。いずれも宗教系の方が一〇%近く肯定派が多くなつた。ところが男女別では、精神世界では男性が三%程度肯定派が多くなり、癒し関連では、女性の方が数%肯定派が多くなるという興味深い結果となつた。

一九九九年には、ヒーリングやチャネリングに参加したり、誘われたりしたかを聞いたが、これはきわめて低い数値であつた。チャネリングに参加もしくは体験した人は、〇・三%であり、同じくヒーリングは一・三%である。同時に質問した「手かざし」が七・六%であつたのに比べてもはるかに少ない。また、チャネリングという言葉を知らない人が六二・七%、ヒーリングを知らない人が四一・二%であつた。誘われたという割合も一〇・二%であり、これらは学生層にとっては、身近なものではないことが分かる。

表21 精神世界・癒し

①精神世界のコーナー

	宗教系	非宗教系
非常に関心がある	6.6%	4.2%
多少関心がある	31.7	24.1
関心がない	38.0	41.0
「精神世界」という言葉を知らない	23.4	30.5

②癒しを扱った雑誌

	宗教系	非宗教系
非常に関心がある	4.3%	2.4%
多少関心がある	26.0	20.9
関心がない	51.5	52.3
「癒し」という言葉を知らない	17.8	24.1

最後に、いわゆる超能力、超常現象関係について見てみる。これらは宗教系と非宗教系であまり差がないので、全体の傾向を比較する。ユリ・ゲラー以来有名になったスプーン曲げの他、オーラの存在とテレパシーについて、どれくらい信じているかをみてみる。スプーン曲げは一九九二年と九六年に質問したが、九六年には信じる人が一〇%減少している。肯定派が三割台から四割台である。一九九八年と九九年に調べたオーラの存在は、これに比べると少し高く、ほぼ半数が肯定派である。またテレパシーは、一九九七年から二〇〇〇年まで質問したが、肯定派は五割前後である。オーラとテレパシーについては、似たような意識であると分かる。(表22参照)

六、むすび

以上、学生の宗教に関する意識や行動の特徴を「宗教」と「宗教周辺の事象」に分けた上で、個々の数値について分析を加えてきた。言うまでもなく、この二つの境界線は明確なものではない。また宗教周辺の事象のサブカテゴリー相互も同様である。ただ、現代における若者の宗教性を議論するような場合、分析視点そのものを柔軟にす

表22 超能力・超常現象を信じる割合

①スプーン曲げ

	92年	96年
++	15.7%	5.4%
+	28.5	28.5
-	25.9	38.5
--	28.4	27.1

②オーラの存在

	98年	99年
++	14.9%	14.8%
+	36.7	36.8
-	29.4	30.8
--	14.0	12.7

③テレパシー

	97年	98年	99年	2000年
++	12.3%	11.9%	11.7%	10.3%
+	42.5	39.3	36.9	37.7
-	30.6	31.6	33.6	34.2
--	13.6	16.0	16.3	16.8

る必要を感じて、あえてこのような区分を試みた。

さて、こうした結果を横断し、あらためて全体の数値を見比べてみるなら、学生世代における宗教への関わりは、どのような構図として描けるであろうか。個々の質問項目で出てくる数値の大小は、相互に関連をもつものと捉えられる。どのようなことには多くの学生が肯定的で、どのようなことに否定的であるかといった見取り図が、おおかたではあっても見えてくる。そこでデータの横断的比較を最後に行っておきたい。

通常「宗教」としてすぐ連想されるのは、宗教団体や運動、宗教家や各宗教の教えなどである。こうした事柄への関心とか信頼の度合いは、次のようにまとめられる。

まずそれぞれの質問に「そう思う」（表では十と表記された数値）という形、あるいはそれに相当するはつきりとした肯定が示された数値で見たい。

①もつとも低い数値群（数%前後）—宗教家が信頼できると思う人、神職に相談したいと思う人、信仰をもつていない人。

②次に低い数値群（一〇%台前半程度）—僧侶に相談したいと思う人、神、仏の存在を信じる人。

③それより多い数値群（一五〜二〇%程度）—牧師に相談したいと思う人、靈魂の存在を信じる人、すばらしい宗教家がいたら話を聞きたいと思う人、どんなに科学が発達しても宗教が必要だと思う人。

宗教にとつて中核をなすような宗教家の信頼、信仰をもつ割合、これがもつとも低いということである。神仏を信じる心などはもう少し多くなるが、宗教へのはつきりした肯定的な見解を示す割合はせいぜいで二割程度ということになる。この面で言うなら、宗教心のある学生は多いとは言いがたい。

では、同じ事柄を肯定派の数値（十と十を合わせた数値）で見るとどうなるであろうか。

①過半数に達しないもの（二〜四割程度）——宗教家は信頼できると思う人、すばらしい宗教家の話を聞きたいと思う人、宗教家が信頼できると考える人

②半数程度のもの——科学が発達しても宗教が必要と考える人、神や仏の存在を信じる人

③はつきりと過半数になるもの（六割程度）——靈魂を信じる人

肯定派となると、半分以上になるものも増え、この数値は、習俗的なものを行う人の割合と重なる。つまり多少消極的ながら宗教心のある学生は、おおまかに半分程度という見方ができる。

また、「宗教」に関することには、否定的あるいは批判的見解が目立ったので、その度合いを確認しておく。飛びぬけて高い数値を示したのは、宗教的トラブルに対処する公的相談窓口の設置の必要性を感じる人で、約七割であった。肯定派だと九割を越した。これは大変興味深い。トラブルに関して、やはり宗教的な問題はけっこう多いということ、それをどう処理するかが分からないということを示している。宗教問題に社会が適切に対処していないと感じていると解釈できる。ただこれは直ちに宗教への批判なり否定なりの態度に直結するわけではないので、それ以外のものを比べてみる。

①批判がもつとも多いもの（三〜四割）——宗教団体が金集めに熱心だと思う人

②それについて多いもの（二〜三割）——街頭布教は法律によって規制すべきと思う人

③それよりやや少ないもの（二割前後）——宗教はアブナイと思う人

ここでは批判的な割合が少なくとも二割という結果になっている。やや批判的、否定的に見ている人の割合でみると次のようになる。

①もつとも多いもの（七〜八割）——宗教団体が金集めに熱心だと思う人

②それについて多いもの（五〜七割）―街頭布教は法律によって規制すべきと思う人、宗教はアブナイと思う人ゆるやかな基準にすると、過半数以上がこうしたこと批判的意見をもっているということが分かる。以上の点を総合的に見るなら、若い世代の宗教不信の構図がおおよそ描ける。まずもって、宗教家、宗教団体を信頼する気持ちが少なく、むしろ批判的に見る目が特徴的である。ただ、宗教心につながるような神仏を信じる気持ち、あるいは見えない世界を信じようとする心は約半数にある。信仰をもたないからこうなるというよりは、信仰をもつ人が少ないのは、これらの現状から導かれる必然的結果であると考えた方がむしろ自然ではなからうか。

では「宗教周辺の事象」についてはどのような傾向を指摘できるであろうか。数値の高さに従って並べてみる。

①もつとも高い数値（八割前後）―親が望むなら散骨・自然葬でいいと思う人

②約半数程度であったもの―葬式のとときだけ僧侶を呼んでもかまわない、キリスト教徒でない人がキリスト教式で結婚式を挙げてもかまわないと思う人、その年の初詣、去年の墓参りをした人、神棚、仏壇が家にある人

③それより少なかったもの（三割前後）―自分の葬儀が散骨・自然葬でいい、自分の葬式は仏式がいいと思う人

④もつとも少なかった数値群（二割前後）―手相、人相を信じる人、占い師に手相、人相、姓名判断をしてもらったことのある人

これは比較的是つきりとした違いがある。習俗的なものは、多くが半数程度のところになる。個人的な関与形態である占いは一割前後になる。これに比べると、散骨・自然葬、及び自分の葬式の方法は、将来予測のようなものがあり、現状の分析とややずれるが、将来の意識の変容を占う上では興味深い。数値も非常に異なる。必ずしも現在の宗教習俗が維持されるかどうか、不確定さを強く感じさせる結果である。

最後に宗教的サブカルチャーについて述べる。これは比較的安定した数値を示すものと、変動が大きいものがあ

った。宜保愛子の靈視を信じる人や、ノストラダムスの終末予言を信じる人は、年毎の変化が大きく、またそこにしだいに減少するという一定の傾向がみられる。これに対し、臨死体験、前世・生まれ変わりを信じる人の割合はかなり安定した数値である。また、チャネリング、ヒーリングのように、体験すること自体が二%未満と、きわめて稀なものがある。

宗教的サブカルチャーの大勢に関しては、次のように区分できる(宜保愛子の靈視とノストラダムスの予言に関しては、一九九五年以後の平均的な数値で判断した)。

- ①もつとも高い数値群(二割程度)―靈感・靈視を信じる人、臨死体験を信じる人
- ②これに次ぐ数値群(一〜二割)―前世・生まれ変わりを信じる人、オーラ、テレパシーを信じる人
- ③もつとも低い数値群(数%程度)―宜保愛子の靈視を信じる人、ノストラダムスの予言を信じる人、精神世界の
本に關心がある人、癒しを扱った本・雑誌に關心がある人

また肯定派で見ると次のようになる。

- ①もつとも高い数値群(六割以上)―靈感・靈視を信じる人、臨死体験を信じる人
- ②これに次ぐ数値群(五〜六割程度)―前世/生まれ変わりを信じる人、オーラ、テレパシーを信じる人
- ③それより低い数値群(二〜三割)―精神世界の本に關心がある人、癒しを扱った本・雑誌に關心がある人
- ④もつとも低い数値群(二割程度)―宜保愛子の靈視を信じる人、ノストラダムスの予言を信じる人、

宗教的サブカルチャーへの関心とか信じている割合といったものは、宗教、あるいは宗教習俗の数値と比べてとくに高くも低くもなっていない。つまりは並行関係にあると見た方がよさそうだ。宗教的サブカルチャーに強く惹かれる人は、宗教を信じる人と同じくらい低い数値で数%程度である。死や死後の世界、靈的世界への関心は、宗

教の必要性を認める人の割合とほぼ同じで二割程度である。超常現象、超能力を信じる割合は、その中間であり、一〜二割程度である。これは神仏の存在を信じる人、手相、人相等を信じる人の割合に近い。

肯定派で見ると、いずれも数値が二倍あるいはそれ以上になるが、関係は似ている。そして宗教や宗教周辺の事象へのはつきりした関わりは、多くて二割程度だが、肯定派というゆるやかな関わりで見ると、六割以上に達することもある。

その他では、宗教への批判的見解の多さと、死に関わる宗教習俗の将来的変化を予測させる数値が目される。宗教的サブカルチャーは、現在のところは、おおむね宗教や宗教習俗に対応するような比率で受け入れられているが、なかには変動の激しいものもある。今後は宗教あるいは宗教習俗に関する意識の変化が、かなり注目すべきこととしてあげられる。とくに散骨・自然葬については、親の意志を一般的宗教習俗に優先させていると解釈できるが、同時にそうしたこれまでの葬儀形態と異なるものを親が言ったとしても、違和感が薄れているということも読み取れる。それゆえ、葬儀という問題に大きな意識の変化がきざしている可能性があるのである。

(註)

(1) このいずれの調査も筆者がプロジェクト責任者となっている。各年の調査メンバーは各報告書に記載されている。

なお、このプロジェクト関連の情報については、左記のホームページに記載してある。

<http://www.ktrim.or.jp/~n-inoue/index.files/jasrs.htm>

(2) 調査の各報告書、及びこれに関連して発表された論文は以下のとおりである。

『宗教と社会』学会・宗教意識調査プロジェクト第1回〜第4回アンケート調査報告 一九九五〜九八年。

・『韓学生宗教意識調査報告』(「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第5回アンケート結果／第1回韓国

学生アンケート結果)、一九九九年。

・『日韓学生宗教意識調査報告』(『宗教と社会』学会・宗教意識調査プロジェクト第6回アンケート結果/第2回韓国学生アンケート結果)、二〇〇〇年。

・『宗教と社会』学会・宗教意識調査プロジェクト第七回アンケート調査報告、二〇〇一年。

井上順孝編『現代日本における宗教教育の実証的研究』國學院大學日本文化研究所、二〇〇〇年。

井上順孝「警戒される『宗教』と維持される『宗教性』——七年にわたる学生への宗教意識アンケート調査から——」(『現代宗教二〇〇二』国際宗教研究所、二〇〇二年、所収)。

磯岡哲也「大学生の宗教意識——一九九五〜九八年調査結果より」『白山社会学研究』第七号、一九九九年。

井上順孝「学生における宗教および超常現象・神秘現象への関心」『國學院大學日本文化研究所紀要』七八、一九九六年。

井上順孝・磯岡哲也・葛西賢太・川又俊則・熊田一雄・佐々木裕子・永井美紀子・松本由紀子・弓山達也「学生の宗教意識——一九九五〜七年のアンケート調査の分析」『國學院大學日本文化研究所紀要』八二、一九九八年。

國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』弘文堂、一九九七年。

(3) 「宗教周辺の事象」を最近急速に流布しているスピリチュアリティという視点から論じることとも可能かもしれないが、スピリチュアリティの概念は日本では、宗教という概念以上に曖昧に使われている。したがって、ここで論じられるような教団宗教以外の事柄をスピリチュアリティとして総括するのは、議論を混乱させる可能性が高いので、宗教周辺の事柄という包括的な言葉を使用しておきたい。これは、あくまで宗教概念を中心におき、それと関連が深いものを一括するという視点に立っている。

(4) このうち、回答者の基本的属性のデータの整理に当たっては、葛西賢太、永井美紀子両氏の協力を得た。

(5) 日本に特有の問題、たとえば、神道に関わること、宜保愛子という霊能者に関する問などは、それに相当する韓国固有の質問を充てた。

(6) この点を詳しく分析したものととして、井上順孝編『現代日本における宗教教育の実証的研究』前掲書、のとくに拙論を参照

- (7) 僧侶や神主は学生世代にとつては、もともと相談の対象とはみられていないということもある。これは神社仏閣が「風景化」していることと関連している。この点については拙著『若者と現代』ちくま新書、一九九九年を参照。
- (8) こっくりさん経験の詳しい研究例として、今泉寿明「『こっくりさん』を契機に発症した鑑別診断が困難な精神分裂病の一例より」『臨床精神医学』21―11、一九九二年を参照。
- (9) こうした宗教的サブカルチャーの一部は、一九八〇年代から九〇年代にかけて、メインカルチャーに近くなつた。しかし、宗教文化の中心部分と理解されるようになったわけではないので、これをミドルカルチャー化したと理解することも可能である。

〔付記〕 本稿は、國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」による研究成果の一部である。